日本における美術資料管理・検索システムの課題と展望

第 1 グループ：ヤナ・リンドヴァー、ヴィーベッケ・オセット・グスタヴセン、李世泳

▲　国立美術館･博物館の学芸員作業における問題点

ヤナ・リンドヴァー

1. それぞれの機構における差

チェコ国立博物館　→　史学、民俗学等と関わったものを収集して展示すること
プラハ国立美術館　→　視覚芸術作品を収集して展示すること

両方ともオープンな機構とは言えず、作業方法における差もある。すると、館内とチェコ国内の Museum にとどまらず、グローバルにより密接な協力体制を結ぶために、国際的レベルの管理システムやその標準化を進めることが最優先である。例えばプラハ国立美術館におきまして、最近は東洋美術部・中世美術部・近代美術部・現代美術部等のコラボレーションを広げてそれぞれの作品の関連性を考慮に入れて展示プロジェクトを行う傾向が強い。それに伴う研究や資料収集にも大きく影響を及ぼしている。日本資料の調査の場合でも研究･展示プロジェクトに直接関連するデータベースにとどまらず、さまざまな関連性を探すべきである。

2. 資料調査に於ける差

研究からカタログの執筆、そして展覧会準備までの流れをできるだけ円滑に行うため、それぞれのデータベースをできるだけオープンにして、海外の人でもわかり易く、参考にし易いインターフェイスにしていただきたい。それぞれ、コレクションのデジタル化を進めるだけではなく、例えば日本作家辞典を更新していただきコレクションとの関連付けなど、さらに改良を進めていただけたら有難い。言い方を変えれば、キュレーターと所蔵庫・図書室・データベースの担当者はより協力体制の元で作業をすれば、さらに良いと思われる。そうすればデータベースの入力方法・参考方法も統一されるのではないかということである。標準化が大切だと思われる。特に日本美術研究における若い研究者が入門的に参考にする主要なデータベースや参考リンク集等が掲載されているウェブサイトにおいては、日本語がまだ十分に分からない研究者でも検索できる様にして欲しい。例えば、言語の選択ができたり、ローマ字の読みが入っているサイトが欲しい。

3. プロジェクト助成における差

世界各地で日本の国立博物館や美術館の素晴らしい収蔵品や資料を紹介したい。そのために、展覧会などを行うための補助金や助成金の制度を知りたい。また、それらの手続きを行うためのデータベースなどがあれば便利だと思う。資金の問題を解決して、より国際的に、より協力的な大きなプロジェクトや展覧会が開催できるようにしたい。ゴールは海外でも大勢のお客様を喜ばせる日本美術の展覧会を開催することである。世界各国に芸術の大事さを伝えるため、例えばオンライン資料を増加したりし、コスト面での改革も同時に大切である。

▲　図書館情報学を勉強している学生としての第一印象：日本研究図書館の課題

ヴィーベッケ・オセット・グスタヴセン

JAL プロジェクト 2015 では、日本の博物館、美術館、図書館に関して知る機会をいただき、感謝しています。

まず、ノルウェー人の図書館情報学の学部生として、そして日本語の漢字をよく分からない者として、私は日本の博物館、美術館や図書館の色々な資料管理システムとオンライン検索データベースの使い方が難しいと思います。例えば、JALプロジェクトで訪問した美術館、博物館の図書館では、一般的に言えば、ほとんどすべてのデータベースは、ローマ字を使って検索することはできないということです。

図書館はさまざまな方法で、自館の利用者に手を差し伸べるために、いくつかの通信チャンネルを使う必要があります。図書館は、例えばFacebook、TwitterやInstagramのようなソーシャルメディアに積極的に関与するべきであると私は思います。

さらに、司書は図書館の敷地内で利用者関連の教育をすることは重要だと思います。例えば、カウンセリングやコースなどです。または、若い世代のひとたちを、大学や高校などの様々な機関に招待して、図書館司書がいかにして、積極的に利用者とコミュニケーションを計り、情報を普及させているかを、知ってもらうべきだと思います。そうすることによって、もっと多くのひとたちに図書館サービスを理解してもらうことができると思います。

アカデミック・ライブラリーでは、一般的にも、また日本美術研究図書館においても、コミュニケーションの場を提供する役割を果たすことは重要です。具体的には、情報 のアクセスの資料源となり、また利用者のニーズに応えることです。

図書館の資料は研究者や学生だけではなく、一般の人たちにも提供できることが理想的であると思います。そのためには、OPEN ACCESSは重要な役割を果たすと思われます。OPEN ACCESSは、インターネット上の科学系の文献への無料アクセスについてです。出版される前に出版物がこの分野の専門家によって見直されて、承認されていることを意味し、 専門家に承認されていることを、一般には、「ピア・レビュー」と呼んでいます。

オスロ大学図書館にはDUOと呼ばれる科学系文献のOPEN ACCESSアーカイブがあります。DUOには修士・博士論文やその他の学術論文が収録されています。2013年からオスロ大学のすべての論文がオンラインで収めると、アクセスできるようになっています。また、雑誌のOPEN ACCESSもあります。従来、印刷物として購入していた雑誌やそれらに収録されている論文がウェブ上で、無料で読めるようになると情報がより広く、効率的に行き渡るようになります。

アカデミック・ライブラリーの現場は、日々変わっていく、情報テクノロジーに関わりながら変化しています。図書館司書はその変化に臨機応変に対応していかなければなりませんし、対応していこうという意思も必要です。

図書館はそれらの変化を真摯に受け止めなければなりません。例えば、司書の仕事は利用者のニーズに合わせたサービス、そして、カウンセリング、教育、訓練、研究現場とのコミュニケーション、そして情報アクセスの橋渡しなどの役割がありますが、変化するテクノロジーを有効に使っていかなければなりません。このことが国籍にかかわらず、私達司書の大きな課題になっていくと思います。

▲　日本の美術資料管理システムに関する提言

李世泳

日本の美術図書館は資料管理の長い歴史とアナログ資料の多いが、美術資料が専門家たちによってほぼ完璧に運営されている。しかし、美術図書館も他の分野と同様技術の変化による過渡期を迎えている。 次はどんな方法で進まないといけないか。

1. 個々の機関の資料管理システムのメタデータの標準化が必要だと 思われる。標準化を

進めることができたら日本の博物館、美術館、研究所、大学などの資料が一回で検索できるホームページがいつか可能になる。今回の見学で見た日本の機関はともに優秀な資料管理システムを運営していたが、他の機関との交流はあまりないようだ。これは韓国も同じだ。利用者の便宜のためにも使いやすいシステムが作られなければならないと思われる。

2. 博物館や美術館の内部での協力が必要である。博物館や美術館は資料より文化財や作品を重要視する。これは当たり前ですが少しは認識を変えなければならない。研究のシンクタンクとして資料が研究の資源だという認識が必要である。美術館内で協力があってこそ、広い視野としての作品、図書、アーカイブの検索が可能になる。

3. アートアーカイブの専門家が必要である。アートとアーカイブ学又は記録学を両方勉強した専門家がアーカイブで働くのがいいと思われる。司書の仕事とアーキビストの仕事は明らかに似ているところがありますが、100％同じではない。これが本と違うアーカイブの資料を理解する人が必要な理由である。

4. 著作権問題の解決である。利用者の立場で重要な資料、又は知りたい資料のアクセスができない場合が多い。オープンアクセスをどう進めるのかに関するOPEN－APIなどの本格的な議論が必要である 。

5. 日本の資料が必要な外国人のための対策である。漢字、平仮名、片仮名、アルファベットなど、現在は検索する方法がそれぞれ違う。日本を直接訪れた外国人はまた見えない壁にぶつかる。皆が知っているグーグルのようなサービスが提供されれば、日本を研究する外国人たちはさらに増加すると思われる。

日本における美術資料管理・検索システムの課題と展望
Issues and Prospects for Art Material Research Systems in Japan

ヤナ・リンドヴァー
Jana Ryndová
ヴィーベッケ・オセット・グスタヴセン
Vibeke 0seth Gustavsen
李世泳
Lee Se-Young

CONTENTS

▲ 国立美術館・博物館の学芸員作業における問題点
▲ 図書館情報学を勉強している学生としての第一印象：日本研究図書館の課題
▲ 日本の美術資料管理・検索システムに関する提言

国立美術館・博物館の学芸員作業における問題点

1.　それぞれの機構における差

チェコ国立博物館　→　史学、民俗学等と関わったものを収集して展示すること

プラハ国立美術館　→　視覚芸術作品を収集して展示すること

両方ともオープンな機構とは言えず、作業方法における差もある。

すると、館内とチェコ国内のMuseumにとどまらず、グローバルにより密接な協力体制を結ぶために、国際的レベルの管理システムやその標準化を進めることが最優先である。

例えばプラハ国立美術館におきまして、最近は東洋美術部・中世美術部・近代美術部・現代美術部等のコラボレーションを広げてそれぞれの作品の関連性を考慮に入れて展示プロジェクトを行う傾向が強い。それに伴う研究や資料収集にも大きく影響を及ぼしている。日本資料の調査の場合でも研究・展示プロジェクトに直接関連するデータベースにとどまらず、さまざまな関連性を探すべきである。

2.　資料調査に於ける差

研究からカタログの執筆、そして展覧会準備までの流れをできるだけ円滑に行うため、それぞれのデータベースをできるだけオープンにして、海外の人でもわかり易く、参考にし易いインターフェイスにしていただきたい。

それぞれ、コレクションのデジタル化を進めるだけではなく、例えば日本作家辞典を更新していただきコレクションとの関連付けなど、さらに改良を進めていただけたら有難い。

言い方を変えれば、キュレーターと所蔵庫・図書室・データベースの担当者はより協力体制の元で作業をすれべば、さらに良いと思われる。そうすればデータベースの入力方法・参考方法も統一されるのではないかということである。標準化が大切だと思われる。

特に日本美術研究における若い研究者が入門的に参考にする主要なデータベースや参考リンク集等が掲載されているウェブサイトにおいては、日本語がまだ十分に分からない研究者でも検索できる様にして欲しい。例えば、言語の選択ができたり、ローマ字の読みが入っているサイトが欲しい。

3. プロジェクト助成における差

世界各地で日本の国立博物館や美術館の素晴らしい収蔵品や資料を紹介したい。そのために、展覧会などを行うための補助金や助成金の制度を知りたい。また、それらの手続きを行うためのデータベースなどがあれば便利だと思う。資金の問題を解決して、より国際的に、より協力的な大きなプロジェクトや展覧会が開催できるようにしたい。

ゴールは海外でも大勢のお客様を喜ばせる日本美術の展覧会を開催することである。

世界各国に芸術の大事さを伝えるため、例えばオンライン資料を増加したりし、コスト面での改革も同時に大切である。

図書館情報学を勉強している学生としての第一印象：日本研究図書館の課題

1. 必要なポイント

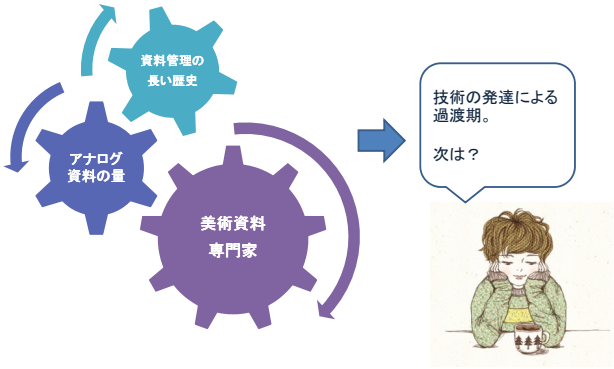
- ローマ字を使って検索することはほとんどできないこと
- 図書館はソーシャルメディアに積極的に関与するべきである
- 図書館の敷地内で利用者関連の教育をすること：カウンセリングやコースなど
- 積極的に利用者とコミュニケーションを計り、図書館がいかにして情報を普及させているかを、知ってもらうべき

2. Open Access

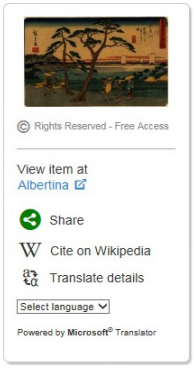
- 研究図書館の資料は研究者や学生だけではなく、一般の人にも提供できることが理想的である
- OPEN ACCESS = 無料アクセス
- ピア・レビューされている出版物
- ネット上で無料で読めるようになると情報がより広く、効率的に行き渡るようになる
- 図書館がテクノロジーの変化に臨機応変に対応することが必要

日本の美術資料管理・検索システムに関する提言

日本の美術資料管理システムに関する提言



日本の美術資料管理システムに関する提言



Abendliche Strandlandschaft

Creator:
Ando Hiroshige

Type:
Druckgraphik

Format:
image/jpeg; Blatt: 19,7 x 31,9 cm; Farbholzschnitt

Identifier:
DGNF6945

Relation:
http://www.kulturpool.at/plugins/kulturpool/showitem.action?kupoContext=default&itemId=4295601883

Is part of:
Graphische Sammlung

Provenance:
Hofbibliothek

Data provider:
Albertina

日本の美術資料管理システムに関する提言

2. Museumの中での協力が必要

博物館・美術館は資料より文化財と作品を重要視する

↓

その認識を変えることが必要（資料＝研究の根源）

↓

一つのシステムで作品・図書・アーカイブの検索ができる

日本の美術資料管理システムに関する提言

3. アートアーカイブの専門家の必要
- アーカイブを専門的に勉強したアーキビストが必要
- 司書≒アーキビスト。 BUT 司書=アーキビスト

4. 著作権の問題の解決
- 重要な資料又は知りたい資料のアクセスができない

5. 日本の資料を必要とする外国人のための対策
- 漢字・平仮名・片仮名・アルファベット…Googleのようなサービスがあればいい